

会 議 録

会議名 (審議会等名)	令和3年度 第3回社会教育委員会議定例会		
事務局 (担当課)	生涯学習部生涯学習課 電話042-769-8286 (直通)		
開催日時	令和3年11月29日(月) 午後2時～4時		
開催場所	相模原市立総合学習センター2階 セミナールーム		
出席者	委員	14人(別紙のとおり)	
	その他	0人(別紙のとおり)	
	事務局	8人(生涯学習課長、他7人)	
公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可	傍聴者数	0人
公開不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	1 議長あいさつ 2 議題 次期への研究調査の継続について 3 報告 (1) 令和3年度神奈川県社会教育委員連絡協議会第2回理事会について (2) 第63回全国社会教育研究大会石川大会について (3) 第52回関東甲信越静社会教育研究大会東京大会について 4 その他		

議 事 の 要 旨

1 古矢議長あいさつ

古矢議長があいさつを行った。

2 議題

古矢議長の進行により議事が進められた。

(古矢議長) 資料1について、各委員から意見を伺いたい。

(秦野委員) 3ページの1つ目の項目で、「求められる役割が多様化する中、公民館業務の負担軽減は喫緊の課題」とあるが、果たしてそうなのだろうか。ここは、負担軽減という言い方ではなく、求められる役割が増えているからやり方を工夫した方が良いというような、負担軽減という言葉ではない表現があった方が良い。コーディネートするということは、職員の関わりが逆に大きくなることなので、負担軽減にはならないし、負担軽減の為にやっていくことではない。

(2)の3つ目の項目の、「地域住民のニーズ」という言葉について、「ニーズ」が、「やるべきこと」ではなく地域住民からの「顕在化したやりたいこと」を指して「地域住民のニーズ」と表現されることが多いので、混乱してしまう。「地域住民の状況に対応した」や「要望に対応」の方が適切ではないか。また、運営方法の工夫はいくつかあるので、「あおぞら公民館」だけをあえて例に出さない方が全体のバランスから見て良い。

4ページの、一番最後の項目は、とても大事なことを書いているので、これを2つ目にあげた方が良いと思う。

5ページの具体的事例の図の表現については、協議が必要である。

6ページの「おわりに」で、社会教育は生涯学習の概念の一部であり、生涯学習の一般的な使い方としては、理念として捉えるよりも学習行為・学習機会として捉えられることが多いので、生涯学習と社会教育を、理念と実践という並べ方にするよりは、「生涯学習社会の構築を推進する中、社会教育は学習という実践をとおして」という表現にしてはどうか。また、「確かな羅針盤」という点については、ヨーロッパ評議会が出している人権教育の羅針盤、コンパスという素晴らしいマニュアルが頭に浮かんで比較してしまうと、少し面映ゆく感じる。

(古矢議長) 意見については、1つずつ整理しながら、さらに修正を加えていきたい。まず、「負担軽減」について、どのように考えるか。

(秦野委員) ここはみなさんがどう考えているかが知りたい。「負担軽減を」を削除し、「公民館に求められる役割も変化し多様化する中、」のあと、「職員の役割を整理し、」につなげ、この「事業すべてを実行するのではなく」の部分、「コーディネート」の役割を担う」または「他のこういったことを担う」等、つなぐ役割についてももう少し丁寧な説明をしていければ良い。

公民館業務の負担軽減をしなければならないということが求められているのか。これまで、公民館業務、職員の負担軽減の議論になった記憶がなく、グループワーク等が出ていたか。

(古矢議長) 公民館のあり方検討会報告書から引用した所だと記憶しているが、違和感があったら適切な言葉に直していきたい。

(大野委員) 私は、20年間大野台公民館の文化部員に参加しているが、公民館には、館長、館長代理、任期付職員のほか、地域から集まった専門部員等のボランティアの方々がいて、公民館業務を共同しながらやっている。「公民館業務」と一言と言われても、誰を対象にした業務なのか分からない。

さらに、公民館は予算が少なく、20年前と今を比べると地域に関するサービスは、半分になっているのではないかと考える。業務をセーブするとか削るとか、そういう話ではないのではないかと。

(事務局) 職員の負担軽減については、公民館のあり方検討会の中で検討があった。地方公務員法の改正で、館長の職の見直しを行った。今まで館長が担っていた仕事を館長代理が負う中で、館長代理の業務の負担軽減というところに留意する必要があるのではないかと議論がなされた。あり方検討会の中でも、役割の整理については、明示が必要であるとの意見があることから、その部分は、文言の修正をさせていただきたい。

(古矢議長) (2)の3つ目の項目の地域住民の「ニーズ」については、「状況」に変更することとし、例示した括弧と「あおぞら公民館」の部分は削除する。

また、3の4つ目の項目は2つ目に繰り上げることとする。

4のポンチ絵の所は後でご意見を伺いたい。

「おわりに」の「寄港地への到着を約束する確かな羅針盤」については、「確かな」の部分を削除する。

1行目の「生涯学習は理念について説き」の部分は、この「理念」を「学習行為」に置き換えるということで良いか。

(秦野委員) 「生涯学習と社会教育」という並列的な並べ方ではなく、「生涯学

習社会の構築化を推進するために社会教育は学習実践をとおして」等、生涯学習社会を盛り上げていくためには、社会教育は実践でもっと頑張っていくんだという、位置関係としたい。「生涯学習社会をつくっていく」という表現は、教育基本法でも明確に記載がある。「社会教育が学習実践で、」としてはどうか。

(古矢議長) そのように文面を修正する。合わせて「ざっくりとした表現」の部分は削除する。

次に「はじめに」について、「しかしそうした状況下だからこそ、次期に架橋する本稿には二つの意義があると考える。」の部分に「ささやかな」を入れたい。

さらにポンチ絵のページについて、秦野委員からの指摘のように、本当にこれで良いかということと、もう少し発展を踏まえて提案があれば、ご意見をいただきたい。

アプローチの問題はひとまず置いておき、2番目の項目の「どのような具体的事例等を取り上げるのがよいか」について意見を伺いたい。

(事務局) 補足をさせていただく。5ページの「研究調査の継続にかかわる今後の方向性」だが、本会の検討、研究の中で、委員のみなさんがグループワークや会議の中で発言されたことを確認した中で、こんなことを取り上げれば良いのではないかというような発言があった。

特にこの2つ目の「どのような具体的事例等を取り上げるのが良いか」は、キーワードにして機械的に並べたもので、ここの部分を肉厚にすると、次期の検討に繋がりやすいと考える。

(金子委員) 災害時などの公民館と地域の方々の関わりを入れたら良い。

(古矢議長) 真ん中の人権の項目が、やけに浮き立って見える。なぜかと言うと、公民館の利用者や職員は、こういうことをもちろん十分理解されているとは思いますが、それに関心を深めて日々活動をされている訳ではないと考える。

(小林委員) 秦野委員作成の資料にも、会議資料として提示されているものと同様に、多彩なワードがある。これらのワードの多くは、コミュニティを構成する要素たるものであり、それぞれ一つの価値であるという捉えをしている。さらに、その中に、文化とか歴史というものも加えていっても良いのではないかと思う。

次に、議論の経過(案)の4ページに「事例を貫く「理念」を明らかにすべき」とあるが、これを明らかにしていくことは、とても重要なことだと考える。

それには、これらのワードの組み合わせをどのようにしていくか、どのようにグルーピングしていくか、あるいは、先ほど話にあった防災は単体で扱っていくのか等々の議論を進めていくことも方法の一つかと思う。

(古矢議長) そのとおり、貫く理念という言葉は大事なものなので、そのまま原稿に入れたが、理念の部分でもう少しご意見を伺いたい。

(小林委員) 過日グループワーキングを行った結果、Cグループのまとめの中に「学びと活動」「大人と子ども」「活動世代の好循環」という言葉があり、同様に、中央教育審議会の答申の中にも「学びと活動の好循環」という呼びかけがあった。これらは共に研究の大きな柱になってくるものと思う。なぜなら、学びや活動を通しての地域の課題の気づきや期待する地域の未来像への世代を超えての取り組みは、絆と好循環を生み出すと考える。この状態が、コミュニティの基盤づくりへのさらなる力になっていくものと思う。

(石川委員) 今まで話し合われた内容がこういう形でカテゴライズされた。各委員の話聞いて思ったのは、今現在の役割として、こういうことが果たされているが、その後こういう役割もあつたらいいというものが付け加わっていき、さらに、それがうまく出てる場合と、まだ未発展の場合のもの、それらが整理されていくと良いと考える。人権という言葉は強い印象を与えるが、大学でもダイバーシティ等、色々な考え方を重視し、学びに変えるというのが一般的になっている。人権教育というところがすごく構えたように見えるが、公民館地域社会の役割として必要だと思う。

(小泉勇委員) 前期研究調査報告書(概要版)に、「地域社会が有する安全、安心に暮らせる場、次世代を育む場」や「自己実現意欲の高まり」というキーワードがあり、公民館の機能としてこのようなことを目指すということがまさしく大事であると考え。人権というのが基本的には、「自分も尊重できるし他人も尊重できる」というような感覚で、学校では人権教育をそういう風に伝え子どもたちに学ばせている。自己実現や自己肯定感を高めるといった、そういう活動の場としてあれば良いと思う。

(秦野委員) 委員が話した中でテーマとなり得るものを拾い、それをカテゴリー分けしたと思うが、例えばフードバンクやフードドライブも確かにフードロスの観点からすると環境省の管轄として「環境」というタイトルがついたのだろうと推測できるが、文脈としては、環境問題ではなくて、「子育て支援」や「つながり」の話の中で、フードバンクや子

ども食堂に来たきっかけを通して、うまく学習と繋げたいという思いがあったので、ここで、「環境」という看板が付いてしまうのは違和感がある。今回「公民館を核とした地域づくり」という仮題が付いているので、このようなアプローチで繋がりを作っていくために大事にしたいものや、子育て支援についても、ジェンダーの問題や人権感覚を育成していくようなアプローチがいる場合等、その柱を事業として実施する場合には、こんな点を入れた方が良く、または、入れない方が良く、そのような分け方になると良いのではないかと。

(大橋委員) 先日受けた研修で使用された図がある。例えば、家庭教育といっても、両親の揃った家庭、ひとり親の家庭、専業主婦の家庭、共働きの家庭と様々なタイプの家庭がある。また、発達障害を理解すれば、人権を尊重する、どんな人の人権も尊重するというように、学びは繋がっていくものであり、キーワードに沿って、それぞれの分野で担える問題をカテゴライズし、それぞれのカテゴリーがつながりあっている。そのように整理した方が分かりやすいのではないだろうか。

(古矢議長) 1つのカテゴリーでは収まらず、分けるということは、反面、危険性もあるということをも十分承知の上で、色々言葉を尽くさなければいけない。これとこれがつながっているというマッピングがとても大事である。

(小泉勇委員) ポンチ絵の部分について、カテゴライズを議論する前に、このゴールだが上から順番に流しているのか、誰向けの事例集なのか。公民館報に載せるというのは誰向けに発信するのか、その辺りが分かりづらい。

(古矢議長) 公民館職員も含まれるが、これは市民の方々に広く公開するものである。このままでは間違っただけで受け取られるのではないかと考えていた。これをもとにこぞって参加してくれるような、そういう公民館の活動になってくれれば良いという思いは全員同じである。それをどういう形でまとめていくかという議論を行いたい。

(事務局) 今期については、コロナの影響もあり、議論がスムーズに進まなかった。期をまたいで次期2年間の中では、公民館でも使えるようなモデルのプログラムや事例集などを盛り込んだような提案ができるようなものを最終的には作っていくところが目標と考えている。本日は、次期へ引き継ぐためにこれまでの経過をまとめた資料という位置づけであり、これを広く市民に公表するという目的では作っていない。これ自体はここまでの中間の経過をまとめ、次期がスタートする際に、これまでの経過の資料で1から掘り起こすのではなく、次の議

論に進みやすくするための資料としたい。

(古矢議長) 事務局の話の部分もあるが、すべての資料は公開が原則となるという視点ですべて精査していることを申し上げる。

(小泉勇委員) マッピングという話が出たが、調査研究をしていくその前段のアンケート調査等の中で、キーワード等が出てくると捉えている。ここで今カテゴライズを議論して固める必要はなく、出てきたキーワードを分析をしながら、形を練り上げていけば良いのではないか。最終的には、事例集など作りながら最後は市民の方が使えるような形というこの流れでいくということが理解できた。

(秦野委員) この「どのように発信していくのがよいか」というのが、「どのような事例を取り上げるのか」と並列で書いてあるが、この報告書をどう発信していくべきかという意味で出ているのか。

(古矢議長) その通りである。

(秦野委員) ここに関しては、まだ議論ができていないため、次期のスタートの際に混乱するのではないかと考える。議論の中では、市民ハンドブックではなく、公民館職員が元気になるようにとの話から、新任の公民館職員が見た際に、「こういうことが公民館に求められているんだ。」「これは難しいが、ここに頼ったり、こう繋げればできる。」ということの手掛かりになるものを、提案できたら良いという話をしていった。市民に発信して見てもらうのはもちろんだが、ターゲットは市民ではなく、その事業を作っていく公民館職員や専門部の方ということで間違いないか。

(事務局) そういう認識でいる。

発信については、ここまで議論がたどり着いていないが、項目として立てていたため事務局で載せたものである。これがあることで混乱するというのであれば、削除しても構わない。次の2年間の中で議論していただきたい。

(小林委員) 仮主題「公民館を核とした地域づくりの新たな展開」ということは、そういうことであると認識している。地域づくりの活動に長い間参画していて、マンネリ化等に直面している状態やコミュニティスクール等において、地域学校の協働活動に関わり、そのあり方を模索している姿を散見する。この報告書は、こういったことに対してもより豊かな展開への新たな視点を提供する大きな役割を果たすことになると思う。

(事務局) 前提として、公民館の枠を掘り下げて実際の活動者向けに活用できるものを意識してきたが、それが別の地域活動でも生かせるのであれ

ば、もちろん生かしていただきたいと思う。その点も含めて発信のところは議論がまだ足りてないと感じるので、次期の議論の中で、深めていただきたいと思う。

(大野委員) 公民館はそれぞれに運営協議会があり、年4回程度開かれていることを私は最近知った。つまり、現場に降りてこない。2年前に社会教育委員になったが、前期の報告書概要版は、とても良くできているにもかかわらず、現場に降りてきていない。どこかで途切れている。現場にどう運ぶのかという議論が必要である。

(石川委員) 目的のあたりがよく理解できていなかった。公民館職員、その関係のところだけにこの提案をまとめていくのは本当に実があるのか。可能であれば、地域の方が活動していく上で、どのように公民館を活用するのか。コミュニティを繋げていくための1つの手段としてこの公民館というものを使っていくというような新たな展開というところで今回は話をしていた。その中の1つとして、もう少し公民館職員のつなぐ役割や深める役割が必要だと思った。その実態をあまり知らない者が、「あなたたちにはこんなものが必要で、こういったことをする必要がある。」ということを上から言うのは違うのではないか。地域の人たちが活躍・活動していけるような新たな公民館の使い方というところについて研究が進むとおもしろいのではないだろうか。

(大谷委員) 公民館について熱く語っていただいているのを聞き、本当に現場の職員にどうやって届けていくのか、広げていけばいいのかと考えていた。公民館長の会議が2か月に1回あるが、こういった論議はあまりされていない。任期付短時間勤務職員は、ただの事務員というような関わりではなく、私としてはもっと公民館のことを理解し、地域に発信をしたりしてくれる方が大勢いて欲しいと考えていた。私の公民館では、オンラインを活用し事業を進めており、堪能な職員がたくさん提案してくれる。来年2月の公民館のつどいで秦野先生にご講演いただければ、そのような職員が増えるのではと期待している。

(小泉喜亮委員) 項目の「子育て」の中で、「子育て支援の男性参画」というところに目を向けてみると、PTAを見ていても会社の理解もあってPTA活動に有休をとらせてくれたり、街を見ていてもお父様方が子育てをしている絵を見る。昭和であれば、お母さんがPTA活動をする、家にいて家事することが当たり前という感覚だったが、今はお父さんお母さん問わず子育てをしている。家庭の状況も一昔前と違い、シングルマザーや片親が増えた。子どもの貧困など様々な面で子育ての形態も変化しているため、ここは男性参

画ではなく、子育てというものが公民館を通じてでも地域の大人たちで担っていこうという、戦後復興の頃のように地域住民で子どもたち見守っていこうというものがまた戻ってくると良いのではないかと感じた。また、発達障害という言葉も少し違和感を感じるので、発達の特性等、受け入れやすいニュアンスにした方が良い。

(古矢議長) 「男性参画」はとります。両性、年齢というのはもうそぐわない。発達特性が1番落ち着くかと思うが、意見があるか。

(若林委員) 発達障害という言葉が前面に出してしまうと、やはり当事者の親御さんは引き下がってしまう。もしそういう講座を聞きたいと思っても足が遠のいたり、認めたくないという気持ちもあったりして、本当は学びたいのに関わりを持てない方もいる。ここは「子どもの多様性、特性の理解」等の言葉にしたい。障害はどうしてもマイナスイメージに取られる方が多いため、全面には出さない方がいいのではないだろうか。

(古矢議長) 「子どもの多様性」は残し、発達障害という言葉は「子どもの発達の特性の理解」としてよろしいか。

(大橋委員) 「子育て支援の男性参画」という言葉は、「子育ての男性参画」ではなく、支援の場にリタイア後の男性も巻き込もうというもので、グループワークの際に青山にあるアイサポートの事例を紹介した。私も子育て支援の場にいるため、お父さんが育休を6か月程度取得し、お父さんと小さいお子さんと遊びに来ている方もたくさんいる。支援の場でのリタイア後の男性を大いに活用しようという意味の文言である。

(古矢議長) よく分かるが、ボックスにはそこまで書ききれない。いろんな多面的な見方がされると思うので、「子育て支援」というワードで落ち着けることでよろしいか。

(秦野委員) ボックス1つ1つの中の言葉を見る方に今いくのか。気になる言葉を出すことでいいと思うが、この図のままでボックスの中の表現を直していくということで良いのか、それとも先程小林委員が言われたように、もう1回柱を整理し直し、その中に言葉を入れていく形で、今書いてある言葉をただスライドさせるのではなく、表現をちゃんと見直すということにしないと、私たちの議論と違う形が出来上がってしまうと思う。確かに柱になる部分をもう一度議論してここに落ち着いた方が良い。

(古矢議長) 共通理解として、本来は柱を立てた上で、これがなされると良かったのだがそこまでいっていなかった。今残された時間で確認するか。

- (事務局) 今議論になっている柱の部分の整理というところでは、もう少し整理していただけたらと思いますので、ぜひ残りの時間でご議論いただきたいと思う。
- (古矢議長) 先程、小林委員から「学びと活動の好循環」と「世代の継続性、コミュニティにおける世代の継続性」が外せないとの話があった。
- (小林委員) 研究調査を進めるにあたって、調査項目や内容をしっかり固め、さらに、その調査結果を整理し、分析していくプロセスの中から新たな観点、キーポイントになるものが浮かび上がってきて、報告書の内容がさらに充実していくことを期待している。
- (事務局) 次の2年間の議論の中で整理し固めていく話だと思う。今回資料として残すにあたって、今この形ではよろしくないということであれば、どういった形で整理したらよいかという意図で伺った。この段階では無理してカテゴライズ分けせずにキーワードを並べた方が良くとも思うがいかがか。
- (古矢議長) 個人的には、これは備忘録だと考えている。議論の途中経過であることを承知の上で、このままの形で残した方が良くということであればそれに従いたいと思う。資料から消してしまっただけで、何も無い状態からまた起こすというのはどうなのか、そんな感想を持っている。
- (秦野委員) 時間的にこれからしっかり柱を立ててということが、難しいようであれば、目指すところは、つながりづくり・地域づくりであるため、その中にこのような例も入れていきたいということで、箇条書きにして、「子育て」、「人権」、「地域振興」という見出しと枠をとってしまっただけではどうか。
- (石川委員) 図とするなら、全体を大きな円にして、円の中にはまだ余白もあるという形にすると良いと思う。
- (古矢議長) 楕円に言葉を入れていくということであるならば、私も小林委員と同じような思いを持っており、やはり活動の多面性、それから相互の関連性、そういったことを意識した事業を取り上げてマッピングしていく。収まり切れない事象を収めようとするにそもそも無理がある。これを1つの考え方の柱として入れたらどうかと考えている。
- (事務局) 大橋委員の話にあった図を確認させていただきたい。今まで議論していく中で、「これが大事、こういうことを公民館でも深掘りしていくと良い。」という意見をたくさんいただいた。そういったものを今後、どういう絵面で散りばめるかという点は、見せ方の部分にはなるかと思う。マッピングで「このことをやると、こういう波及効果もある。」というようなものが、少しでも絵として多角的に見られるも

のができたら良いと思ってる。「まだ余白もあり、次期の検討の中でこういうものも付け加えていこう。」ということのつなぎの資料としたいと考えている。事務局にもそのようなことを考える時間をいただきたい。

(三井委員) 出し方として、事例での発信があるが、こういった事例を作るとき、私が働いている中で、成功事例は欲しがらず、失敗事例を欲しがるといふところがある。この中でその失敗がどういう自由な発想の中で失敗したのかを含めて、また、何が足りなかったのか、なぜそこに至ってできなかったのかとか、そういった要素も入るとより厚みが出るのではないかと思う。1つ例にとると、フリースクールで働いていた時、食育として、小学生から高校生までの生徒とお昼を作った。終わった後に女性の利用者さんが「男子はすぐ食べ終わると遊びに行ってしまう。」との発言があり、そこでスタッフは、「じゃあみんなでどう負担がないか話し合しましょう。」と問いかけた。これは1つの正解だが、ここで社会教育的に取り上げなきゃいけない部分があるとしたら、ジェンダーギャップ指数のところであると考えている。なぜ男性が女性に対して家事的なものをやらせるのかということを実は言わなくてはいけなかったのにそれが言えなかった。しかし、食育としては完成していた。無農薬の小麦を使ってとか、そういうことはできていたが、付随するものとしてそこに働き掛けることができなかった。どこまで事例が出てくるかどうか分からないが、前回の話し合いで言うと、公民館職員の異動によってどういう不都合が起きてしまっているのか、そこも含めて事例集に落とし込めれば、より厚みが出るのではないかと考える。

(長沢委員) 公民館に長くボランティアとして携わっており、先日小学校からのオファーで、2年生に向けボランティアの話をした。公民館は職員だけでなく、ボランティアで成り立っているという話もした。子どもたちは、私は仕事として行っていると思っていたようで、すごく驚かれた。「なんでできるの。」と問われ、「楽しいからだよ。」と答えてきた。「自分で考えたものが形にできるそれが楽しいことだと思って、それは学校でも同じようなことはしているけども、外でもできるんだよ。」と伝えてきた。一見成功な部分もあったが、支援級に通っている子がおり、一生懸命質問をしようとするが、うまく言えず泣いてしまった。でもちゃんと先生が気づき、「何を聞きたかったの？」というフォローができた。そういうことは、外の間人入らないとできないなと思った。このような事例はなかなか公民館にいると分からない。しかし、

公民館に携わっている人間だからこそできた活動でもあったので、うまい形で職員の方にもこういうことがあったと伝えられたら良いと思う。

(安西委員) 公民館の中での活動において、特にこの2年間はコロナ禍で、ボランティアとして活動している人が出にくくなっている。公民館によっては、学校を1つの公民館で4校程度抱えている場所や他校との交流を控えるべきである等、従来とは少し違った環境になっているのではないか。今みなさんの話を聞き、従来のような活動を普通に行うことが出来る状況下で話が進んでいるように感じるが、今の状況とは違うため、難しさを感じる。もう1つは、ボランティアの中での新たな人材の発掘、役員の専任等が非常に困難な状況である。どの組織も縮小化しており、そういった時に公民館が中心となり、子どものみではなく、親も参加することで、ここではこんな楽しい事が行われているということを理解させれば、参加の枠が広がると思う。表面上の話だけでなく、具体的なところまで掘り下げないと机上の空論だけになってしまう。自治会にも入らない人がどんどん増え、難しい時代になったなと感じている。そういう中にあるには、交流の場として公民館をうまく利用することで、1つのきっかけになるのではないかと考える。

(古矢議長) アンケート調査とヒアリング調査についてもここで議論を交わしたい。事務局の考えはあるか。

(事務局) これまでのグループワークの中でアンケートをやる際に、その項目や聞く内容なども会議の中で考えていくのもいいのではないかという話があった。次期の議論はそこから始めていくのも1つの方法であると考え。実際、アンケートの内容ややり方なども議論していただき、その結果を踏まえて、具体的な事例などもどうするのか、柱をどうするのかという話に繋がっていけば良いと思う。アンケートのやり方として、毎年市として実施している、市民アンケートの中で、こちらの議論に使えるような質問項目があれば結果などもお示ししたい。何か入れ込めるかについては、事務局で調整していきたい。

(石川委員) アンケートは予算が必要となるが可能か。アンケートも紙ベースなのか、Web調査でやるのか。利用したことがない方を含める場合には、無作為抽出ということになると思うが可能なのか。公民館を利用している方であれば、各公民館で配布し、お願いできると思うが、そうではない場合のアンケートの仕方を検討する必要がある。最近はWeb調査も無料で簡単にできる。1つのやり方として良いのではないか。

(事務局) 予算の話が出たが、可能な限り、お金をかけない形で工夫してアン

ケートを実施したいと考えている。無作為に何千件、何万件の通知を出してというものは難しいため、知恵を絞りながら、やり方を検討していきたい。

(大野委員) 公民館報を例にすると年4回発行する予算があると思うが、制作にかかる職員の人件費を含めると数百万円の予算を使っている。館報は要領よく編集すれば広報ツールとしてまだまだ生かせる。そういう教育が大事だと思う。横読みなのに右開きだったり、そんな基本的なことができていない。また、お金のことで言えば、4～5日前の日本経済新聞で、相模原市は事務的経費比率がワースト4番であり夕張より悪いとあった。ここまで財政が硬直化していて、年々予算が削減される中、公民館にこれから何を求めているのか、現場にいるとそういう恐怖心がある。予算があると思ったら削られてしまうという形の繰り返しで、現場とここで議論していることのちぐはぐさというのはどうしても抜けない。

(秦野委員) アンケート調査については、市民アンケートの中にうまく入れていただけなのが1番お金の面では大きい。さらに、独自のWebアンケートができると良い。その可能性はあるか。

(事務局) 工夫したものを少し検討させていただきたい。

(秦野委員) 生涯学習課のHPにその枠を入れることは可能なのか。リンクでも構わない。そのあたりも検討いただきたい。ヒアリング調査については、ここでの議論と公民館現場とが離れているというのは非常にもったいない。研修や座談会等の例があるが実施できる可能性があるという認識で良いか。

(事務局) グループワークの中で、そのような場を設けたいという意見があった。社会教育委員会議として実施するという方向に進めば、事務局も実施に向けて準備を進めていきたいと思っている。

(古矢議長) 公民館利用者あるいは職員とのギャップが生じないようにすることはとても大事である。前任の藤嶋副議長から、「地域に根差した公民館、住民の生活基盤としての公民館として、32館頑張っているんだから古矢さんそのあたりはよく覚えておいて欲しい。」と言われた。良い面を伸ばしながら、足りない点や先取りするべきことを入れていくという視点でみなさんの意見を聞きながらヒアリング調査等の検討も含め進めていく。

議論の整理として、「理念」をどう取り上げていくか。例示が出たが、次期に改めて話し合うこととする。また関係するアンケート調査の項目などもそれに左右されると考える。カテゴライズされた項目に

については、枠を取り払って箇条書きをしていき、補足説明を設けたいと思う。どのような形で提案をまとめるのがよいかについては、今まで出された意見を基に記載している。発信の形も例示なので、ひとまずこれはこれでよろしいのではないかと考えるがいかがか。

(秦野委員) 発信については先程、削除するという事になったと思うが違うのか。

(事務局) 例示が逆に誤解を与えてしまうということで、項目を削除するという認識である。

(古矢議長) どのように発信するかは削除するという事でよろしいか。この項についての議論はここで終了する。他にご質問はあるか。

(小泉勇委員) アンケート調査について補足する。小中学校でもQRコードを使用し実施できている。視野に入れていただければと思う。

3 報告

(1) 令和3年度神奈川県社会教育委員連絡協議会第2回理事会について

古矢議長より、資料に基づき報告を行った。

(2) 第63回全国社会教育研究大会石川大会について

古矢議長より、資料に基づき報告を行った。

(3) 第52回関東甲信越静社会教育研究大会東京大会について

事務局より、資料に基づき報告を行った。

4 その他

事務局より、次回定例会スケジュールを説明した。

古矢議長のあいさつにより、会議を終了した。

以上

令和3年度 第3回社会教育委員会議定例会出欠席名簿

	氏 名	所 属 等	備 考	出欠席
1	小泉 勇	相模原市立小学校長会		出席
2	金子 友枝	相模原市文化協会		出席
3	小泉 喜亮	相模原市P T A連絡協議会		出席
4	大谷 政道	相模原市公民館連絡協議会	副議長	出席
5	安西 信行	相模原市青少年関係団体連絡会		出席
6	大橋 千景	虹のおはなし会		出席
7	若林 由美	一般社団法人星と虹色なこどもたち		出席
8	石川 利江	学識経験者（桜美林大学教授）		出席
9	秦野 玲子	学識経験者（RE Learning代表）		出席
10	古矢 鉄矢	学識経験者（学校法人北里研究所参与）	議長	出席
11	小林 政美	学識経験者（特定非営利活動法人男女共同参画 さがみはら 副代表理事）		出席
12	大野 俊文	公募		出席
13	長沢 亜希子	公募		出席
14	三井 泰平	特定非営利活動法人ゆどうふ		出席